

レポート・論文の書き方

—入門—

第2版

富山大学・人文学部

池田真治

2013年7月3-4日

於・富山大学中央図書館

於・芸術文化学部図書館

本日のメニュー

- なぜレポートを書かなくてはならないのか？
- BAD SAMPLES：落ちたレポートたち
- レポート・論文を書くために、何をすべきなのか？
- レポート・論文の育て方
- レポート・論文の構成
- 単なる「作文」から「論文」へ
- 論証の仕方
- 読み手に「伝わる」文章を書く

対象と目的

- **対象** . . . レポートを書く自信がない学生、これからはじめてレポートを書く学生、知的関心のある学生。
- 「論文の書き方」本の類いをすでに読んでいる方は、出る必要ありません。

対象と目的

- **目的**・・・レポートを書くために、持つべき心構えや、守ってほしいルール、真似しておけば大丈夫なパターンを伝えたい。
- 何を**しない**か・・・論文の細かい書き方、独創的なアイデアの得方などには、いっさい触れない。文学的なレトリックなどについても、一切扱わない。
- 「論文の書き方」本はいくらでも出ているので、この講習の後で、そのどれかを必ず読んでほしい。

なぜレポートを書く（書かない）のか？

1) 学生側の視点。

- レポートはめんどくさいなあ。書きたくないよう。
- 長い文章は、あまり書いたことがない。自分の考えを整理するのが苦手だ。自信がない。
- だけど、単位をとるためだし、しかたない・・・。
- この授業、レポートだけ出せば、単位とれるらしいよ。楽勝じゃん。
- うわ、この授業、レポートで成績評価つけるのか。先生厳しそうだし、とるのやめとこう。

なぜレポート課題を出す (出さない) のか？

2) 先生側の視点。

- 授業で扱っている内容は、試験では評価が難しい。
- 苦勞してレポートを書いてはじめて、何かの知識が身に付くと思っている。
- 試験問題をつくったり、試験監督をするのは、面倒だなあ。
- レポートの採点は、時間がかかる。試験の方が楽。
- 今時、レポート課題を出しても、出さない学生が多いし、教育効果があまりない気がする。

レポート問題

- 授業には出てきたが、結局レポートを出さずに単位を落としてしまう学生が、大勢いる。
- せっかくレポートを提出しても、不可になってしまいう学生が、これまた結構いる。

レポートのジレンマ

レポート課題を出さない



ますます、まともな文章すら書けない（！）大学生が・・・。

レポート課題を出す



ますます単位を落としてしまう学生が・・・。

レポート課題を出す授業は (今のところ) 必要である。

- 大学を卒業するためには、ふつう、**卒論**（**卒業論文**）を書かなくてはならない。できれば、まともな、いい卒論を書いてほしい。
- 「大学」は、社会に出るための予備校の別名ではない（最近はそのような方向？）。卒論が課されているということは、大学は、教育機関であるとともに、学問の「**研究機関**」なのである。

レポート課題を出す授業は (今のところ) 必要である。

- 受けてきた教育を、一人の学者として、研究に 응용して、はじめて「学士」 bachelor となる。卒論はその集大成。
- 社会に出てからも、「レポート」のたぐいは付きまとうし、論文作成で身につけた技術や知識は、後々でも何かと役に立つ。生きるために役立つ知的訓練をしている、とポジティブに捉えよう。



学生側：どうせ書くなら、いいレポートを書きたい。

先生側：どうせ読むなら、いいレポートを読みたい。

グッ



書く決断、提出する勇気。

- とにかく、あれこれと悩まずに、まずは書くと決めること。そして、提出する勇気を持つこと。
- いざ、書き始めると、意外と楽しい！
- 終わった後の達成感がある！！
- がんばれば、いい成績がつく！！！！

落ちたレポートたち

- レポートを書いてみたけど、落ちてしまった！
- 何がいけなかったんだろう？
- レポートの書き方なんて、教えてもらってない！
- 先生が悪い？！

落ちたレポートたち

- 絶対にしてはならないことをしてしまっている。
⇒問題外として不可に。
- 出すには出したが、ほとんど内容がない。感想文と勘違いしている。
- かなり学問をなめている。やる気がまったく感じられない。
- 書くには書いているが、課題の要求にまったく答えていない。

絶対にしてはならないこと

- コピペ（丸写し）
- 無断借用
- 盗用
- 論文代行・代筆

絶対にしてはならないこと

- コピー（丸写し）
 - 無断引用
 - 盗用
 - 論文代行・代筆
- 

コピペ、ダメ。ゼッタイ。

- コピペしても、典拠を示しておけばそれでいいか、という問題でもない。
- コピペそのものがないのではなく、素材の「**使い方**」が問題なのである。



参考：www.dapc.or.jp

- Q. といっても、コピペが問題になるのは
はどのようなときだろうか？

著作権の問題

- 他人の文章や図、写真などの著作物を自己のレポートや論文に利用したい場合
→ 「許諾を得て組み込む」か「引用」すれば問題ない。
- したがって、著作権侵害の可能性が起こるのは、他人の文章等を、作者の許諾も得ず、きちんと引用したことがわかる仕方も取らず、あたかも自分の文章であるかのように組み込んでしまうとき。

著作権法

第三二条（引用）

（１）公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない。

（２）国若しくは地方公共団体の機関、独立行政法人又は地方独立行政法人が一般に周知させることを目的として作成し、その著作の名義の下に公表する広報資料、調査統計資料、報告書その他これらに類する著作物は、説明の材料として新聞紙、雑誌その他の刊行物に転載することができる。ただし、これを禁止する旨の表示がある場合は、この限りでない。

『六法全書』平成25年版（有斐閣）より

満たすべき要件

- (1) 引用されるのは、公表された著作物であること、
- (2) 引用部分と自分の著作部分が、はっきりと区別されていること、
- (3) 自分の著作物が主で、引用された著作物が従の関係にあること、
- (4) 引用する正当な目的がある、あるいは、引用の必要性・必然性があること、
- (5) 出典・出所がきちんとわかるよう明示されていること。

参考：著作権委員会、委員長コラム (8) より

URL=< http://www.sikaku.info/cho1_120309.html >

自分で考えること

- レポートでは、授業で扱った内容に関して、どれだけ理解したか、授業外でその問題についてどれだけ考えているかを問うている。
- コピペをされてしまうと、それらが評価できない。
- 無断の引用は、著作権法に違反する立派な犯罪行為となりかねない。
- そもそも、自分の理解を示す努力を怠り、他人の書いたものをあたかも自分のもののごとく見せかけ、自己評価を得ようとする根性は、学問の精神をけがすもので、大学人としては許されない。

BAD SAMPLE

- 配布資料の BAD SAMPLE を見てください。
- 何がイケナイのだろうか？

BAD SAMPLE

- ○○教授→敬称が間違っている。准教授とかもいる。
- コピペである。あるいは、コピペを巧妙につなげている。（だいたい、すぐバレます。）
- 単なる箇条書き。文章がまったくつながっていない。
- 参考が「ウィキペディア」だけである、あるいは、どこかのホームページだけである。（そこを辿って行くと、コピペが確認される）。

BAD SAMPLE

- 単なる感想文。「～が好きです」。「良かったです」。「～は面白いなと感じました」。「難しかったです」。「貴重な経験ができました」。etc.
- 感嘆符（！）や、（笑）、（汗）、☆など限られた場でのみ通用する略語、顔文字がついている。
「先生の授業は、本当に面白かったです（^ω^）」。twitterやSMS、掲示板じゃないんだし、顔文字はつけない。（かわいいけど。）

BAD SAMPLE

- 「もっとまじめに勉強すれば良かったと、いまさら後悔しています」 → いまさら後悔はいいから、ちゃんとレポート書いてね！
- 「あまり授業に出れず、資料が手に入らなかったので、・・・」 → 余計な言い訳はしないでね！

BAD SAMPLE

- 誤字・脱字が多すぎる。ある程度は見逃すが、あまりに誤字・脱字が多いと、一回も見直すことなく提出したことがバシバシ。そして、当然、内容も良くない。
- 引用の典拠が明記されていない。二次文献から孫引きしない。

BAD SAMPLE

- 「先生の授業は、本当に面白かったです。こんな授業が受けれて良かったです。」 → 情に訴えない。あと、お世辞とかいらない。感想は、別紙にでも書くべし。
- 「できれば単位ください」 → こう書かれると、できれば単位、あげたくない。懇願や脅迫をしない。

BAD SAMPLE

- 文の**主語**が抜けている。そもそも、文章になっていない。
- きちんと**理解**した上で、文章を書いていない。
- **自分のことば**で書いていない。「・・・」と言っている。／・・・では、「・・・」とされる。　　というように、引用に語らせている。
- つまり、**自分で考えていない**。

悪いレポートの特徴

- 問題文をきちんと読んでおらず、課題と無関係なことを書いている。
- 議論をせず、ただの感想文になっていたり、ただ自分の信念を語っている。
- 論じるには字数が少なすぎて内容が希薄である。
- 漢字の間違いや誤植が頻繁にある。

良いレポートの特徴

- 課題文に適確に解答している。
- 自らの主張に対して、論拠・理由がきちんと示されている。
- 議論が論理的なしかたで、分かりやすく展開されている。
- 場合分けを用いるなど、一方的にならない・偏らないしかたで考察している。
- 一般的・抽象的になりすぎず、具体例が示されている。

何をすべきなのか？

1. まず課題を正確に理解する。
2. テーマを決める。
3. 資料を集める。
4. 資料を読む。
5. 書けるところから書く。

まず課題を正確に理解する

- 「・・・まとめなさい」。←あいまいな課題。
- 抜き書き・箇条書きだけ、出来の悪いレジュメないしノートみたいなものを提出してくる学生がいる。
- ふつうは「“きちんとした文章で”、“自らのことばを用いて”まとめなさい」ということ。
- いったい何が課されているのか、きちんと理解し、レポートに正確に反映すること。

資料を集める

- 巻末の参考文献リストを見る。
- ネットの文献探索や図書館を利用する。
- 先生に直接相談する。
- 詳しくは、中央図書館の「文献の探し方・入手方法」講習会（あるいは資料）を参考にしてください。

信頼できる情報を見極める

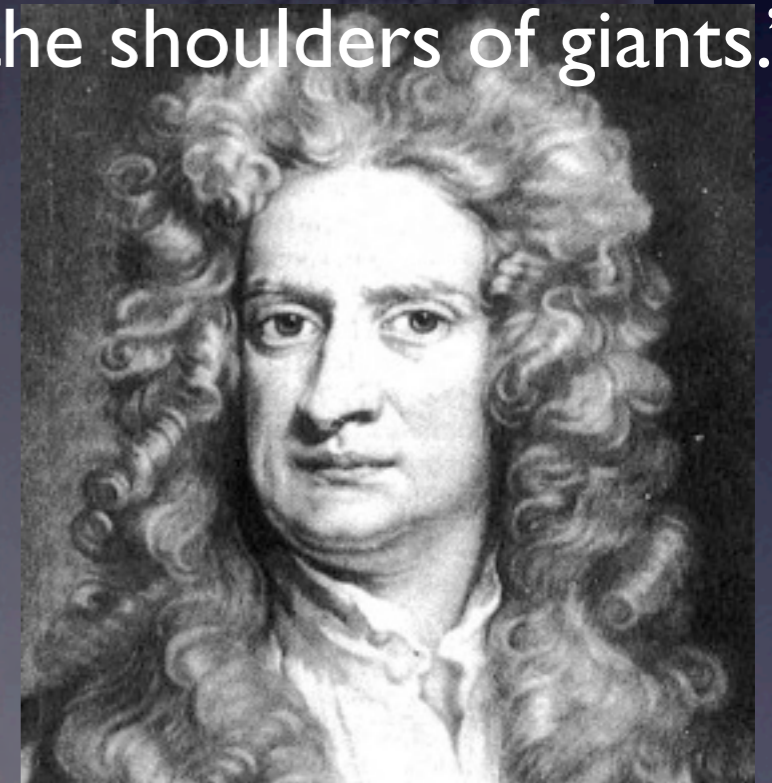
- 個人ホームページやブログ記事を参照に挙げる学生が多い。
- 信頼性に問題がある記事を参考にしても、たいしたレポートは書けない。
- ウェブサイトは、素人が好きでやっていることも多い。専門家の場合、たいていは、きちんと所属がプロフィールに書いてある。
- 情報の見極めが大事。

巨人の肩の上に立つ

Isaac Newton
1643-1727

- 新書や論文の一つも読まないでレポートを書くのは、かなりの冒険。
- 天才あるいは無から創造できる神でもなければ、何かを参考にしてレポートを書いた方が無難。
- まずは、扱っているテーマに関し、その分野を代表する専門家の著作や論文を参考にするのが筋。

“If I have seen furthur, it has been by standing on the shoulders of giants.”



Cf. Letter to Robert Hooke
15 Feb. 1676 (5. Feb. 1675)
Correspondence of Isaac Newton,
Vol. I, p. 416

周知のことは書かない

- 「『広辞苑』によると・・・」× イラン。
- 教師の反応→授業で散々説いてきたテーマなのに、今まで何を聴いてきたのか？・・・啞然。
- まず辞書から、というスタイルの学問もあるが、それは例外。深い分析がなければ、このスタイルは通用しない。
- 参照すべき辞書とそうでない辞書がある。できるだけ、**専門的な辞書**を参照すべき。

引用する際の注意

- 周知の事実や基礎知識を、わざわざ典拠で示す必要はない。
- 情報の信頼性が薄い資料を、議論を支持する典拠としてはならない。

典拠を示す

- 引用したそのデータを、どこから取り出してきたのか。
- 例：「デカルトによれば、「**xxxx**」である。」
- 「どこに」、「**xxxx**」が書かれていたのか。
- 受け売りを、まるで自分が考えたかのように書くのは、知に対して誠実ではない。御法度。

引用の仕方

- 引用したからといって、理解を示したことにはならない。
引用しっぱなしはダメ。必ず、自分のことばで、引用した箇所を解説する。
- 脚注 あるいは 引用末尾に、参照箇所を挙げる。
- 3行以上の引用→字下げをして提示（WordやTeXなど、ソフトによっては引用・脚注機能があるのでそれを利用）。
- 引用は長すぎてもダメ。議論に必要十分な量におさめる。

自分のことばで書こう

- 辞書にせよ、参考書にせよ、ただ写すだけで済ませるはならない！
- 資料を調べて理解したことを、**自分のことば**で書くこと。

キーワード

- レポートでは、短いページで、**論点（ポイント）**を押しえて自分の主張を立証しなくてはならない。
- テーマに関して読み込むべき「**キーワード**」を明らかにする。
- メモなどに書いて、キーワード間の**関連性**（結びつき）をはっきりさせる。
- 本文では、キーワードを**強調**する（ゴシック体や鍵括弧「」で）。

レポートの育て方

1. 具体的なテーマを決める。
2. 参考となる資料を集めて文献表を作成する。
3. 目ぼしをつけた参考書を読む（インプット）。
4. アウトラインを書く（アウトプット）。
5. パラグラフ・ライティング（アウトプット）。
6. 3～5を繰り返して、論文を膨らませていく。場合によっては1や2に戻る。

レポートの育て方

- 論文が膨らんでいくと、議論の骨組が見えにくくなる。
- そこで、レポートに盛り込む内容を、取捨・選択していく。
- 読み手にわかりやすいように、**アウトライン**（論文の輪郭・筋道・骨格・全体の構造）に沿って、議論全体を“**クリア**”にしていく。
- 議論の本筋に**必要ないものは、バッサリ**切る。

レポート・論文の構成

- はじめに（論文の要約）
- 本論（問題提起・主張・論証）
- 結論（まとめ）
- 注
- 参考文献

配布資料を
見てね！

レポート・論文の構成

- 論文を書くときには、それなりの「**形式**」と「**パターン**」がある。
- 要するに、論文の「**テンプレ**」（**ひな形**）のようなもの。
- 一度身に付けると、後が楽になる。目的に応じて、適宜、アレンジする。
- それに基づいて論文の「**アウトライン**」を作る。

論文の基本構成

- **主題** (何について。テーマ)
- **問い** (これから何を問題にするのか)
- **主張** (問いに対する答え)
- **論証** (主張を論理的に根拠づける)
- **結論** (主張の論証を要約)

論文ですべき主なこと

- 自分の言いたいことが何か／何でないかを明確にする。
- 自分の意見とは異なる見方（反対意見や別の立場）を念頭して、議論を構成する。
- なぜその主張が言えるのか、その根拠を示す。また、反対の意見ではなぜだめなのか、別の立場を批判する。
- 主張を支持する具体例を提示する。

単なる「作文」から「論文」へ

- 自分の考えを述べただけでは、単なる作文。
- あるテーマについて、ある程度の長さで、自分の考えをはっきりとした仕方でもとめたとしても、まだ作文。

単なる「作文」から「論文」へ

Q. 何をしたら、「作文」から「論文」
になるのか？

単なる「作文」から「論文」へ

A. それは「論証」である。

論証の仕方

- 主張は、「必ず」論証しなくてはならない。
- 主観的・恣意的・独断的な判断は極力避けること。「～だと思ふ」は、極力使わない。
- 主張は、「どういうことなのか」、「意味」を「解説」したり、「なぜそう考えるのか」、きちんと「根拠」・「理由」を示さないと、ただの感想文。論証にならない。
- 「というのも、・・・だからである」◎

論証の仕方

- どういうことなのか
- なぜそう考えるのか
- この二つを意識して、自らに問いかけて、論証を構成していく。

わかりづらいいしレポート

- 論証があちこちに飛んでいて、議論の本筋から逸れてばかりいる散漫なレポートは、複雑で、読む側もわかりづらい。というか、つらい。
- では、どう書けば、わかりやすい、クリアなレポートになるのか。

読む相手を意識する

- 自分が書いた順序ではなく、相手が読んで「**理解しやすい順序**」にしたがって議論を組み立ててあげると、読む側にはクリアで読みやすく、言いたいことも伝わりやすい。
- **<問い—答え>構造**。パラグラフのはじめに問いを投げかけて、それに答える方式をとると、読者には議論の展開がわかりやすい。

線型な論証

- アウトラインを「**線型**」(リニア)に組み立てる。
- 論理的な構造が見えやすいように、**パラグラフ**(考えのひとまとまり)ごとに、段落を分ける。
- パラグラフが「**流れる**」ように仕立てる。

線型な論証パターン

「Xである」 (主張)



「なぜならば、Yだからであり、YのときXだからである」 (根拠)



「たとえばZである」 (具体例)



「したがってXである」 (結論)

線型でないパターン

- 序・破・急
- 起・承・転・結
- これらはストーリー性をもたせる上では重要だが、必ずしも線型な論証ではないので、論文ではむしろ除外すべき展開。推理小説のような最後まで犯人がわからない、ドキドキした展開はいらぬ。
- ただ、論文を読む上で心地よい文章のリズムのようなものは、あった方がいいかもしれない。

文章をうまくつなげよう

- 「なぜならば」「たとえば」「したがって」など、その場所にふさわしい接続表現を用いて、接続関係をはっきりさせよう。
- 接続表現をうまく組み合わせることで、文章の論理的な構造がはっきりし、議論の流れがクリアーになり、自分の主張が読み手に伝わりやすくなる。
- 詳しくは、配布資料を参照。

読み手に「伝わる」文章を書く

- 書いた本人にしか分からないようだと、せっかくの努力が台無し。
- 読み手が議論の道筋を追って理解できるように、「**伝わる**」文章を書く。
- きちんと「**論理的**」に議論は運んでいるか？
- できるだけ、内容を「**シンプル**」に。盛りすぎない。（※ただし、「適度な複雑さ」は要るが）。

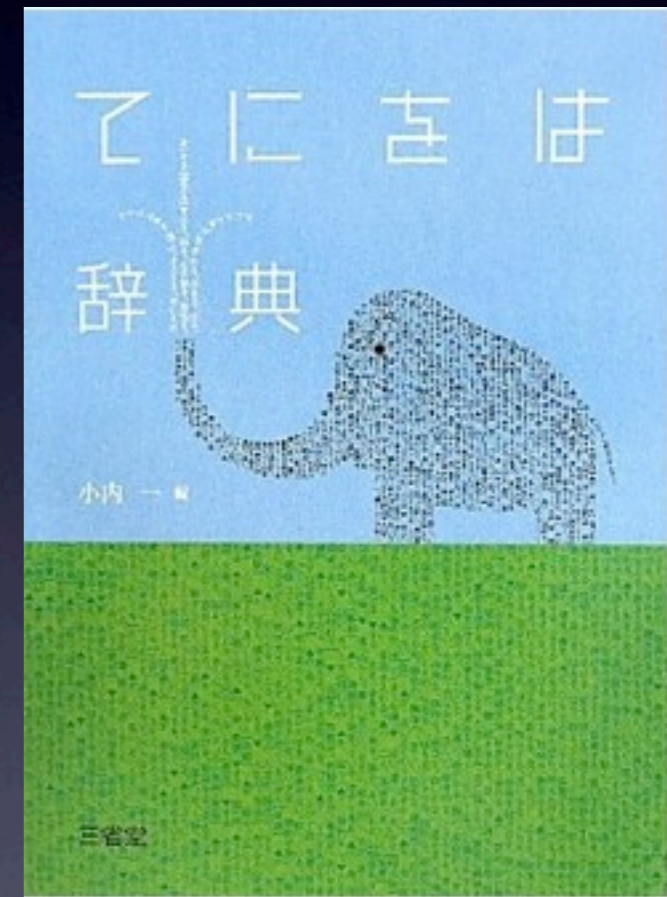
読み手に「伝わる」文章を書く

言い換える

- 難しい表現 ⇒ シンプルな表現
- 抽象的なこと ⇒ 具体的なこと
- 個別的な事例 ⇒ 一般的なまとめ

読み手に「伝わる」文章を書く

- きちんと「日本語」になっているか？
- 国語辞典・類語辞典の活用。
- さらに上の文章を目指すなら、『てにをは辞典』や文章作法に関する本を参照する。
- 日頃から「文章を書く習慣」をつける。



読み手に「伝わる」文章を書く

「読み手」を意識して文章を書こう。



参照（レファレンス）

- 他人の意見や他人のとったデータを、無断で用いてはならない。自分の意見と他人の意見を分けること。
- 読み手が、議論の証拠を確かめ、同じ資料をひもとくことができるように、きちんと「**典拠**」（=出典）を示す。
- JASRACなどがからんでこないかぎり、たいていは、きちんと資料の典拠を示せばオーケー。

参照（レファレンス）

- 文献の指示には、いくつかの様式があるが、どれか一つに統一すること（指定されている場合もある）。

A) 本の場合

- 著者名、『書名』、出版社、出版年、引用ページ。

B) 雑誌論文の場合

- 著者名、「論文名」、『雑誌名』、巻、号、出版年、引用ページ。

最後の仕上げ

- **書式を統一**し、体裁を整える（レイアウト、脚注、フォント、字数、参考文献、etc.）
- **寝かす**。（つまり、何日間か放っておく。後で冷静に見直すと、意外とボロが見つかったり、俯瞰によって良い考えが浮かぶもの）。
- **声に出して読む**。文章のリズム感をチェック。
- **批判的吟味**。自分の書いたものにつっこみを入れる or/ and 他人に読んでもらい、ダメ出しをしてもらう。
- **校正**。誤字・脱字チェック。用語の統一。
- 詳しくは、**配布資料のチェックリスト参照**。

それでも落ちてしまったら

- 以上のことを踏まえていれば、レポートに失敗するはずがない。
- それでも落ちてしまったら、先生が悪いのか、よほど向いていないか（レポートが書けなくても、生きて行ける・・・）。
- あまり成績が良くなくても、そこまで気にしない（所詮はレポート）。次回には、より良いレポートが書けるように、最終的には、いい卒論が書けるように、がんばればよい。
- むしろ、今のうちに失敗しておくべき。誰もが自分の黒歴史を見て、より良くなろうと思うもの。今は成長する期間。

勘違いしない

- レポートの書き方を真似たからといって、「いいレポート」が必ず書けるわけではない。
- レポートの形式は、学生なら知っていて当然のことにはすぎない。
- 要領よく、うわべだけ取り繕ってみせても、先生にはバレル。
- 最終的には、レポートの内容、「**中身**」が勝負。

結局はこれに尽きる

- 「中身」を良くするには・・・？
- 自分の書いたものに厳しくツッコミを入れる、**自己批判的な態度。**
- 自分のできる最善を目指して何度でも書き直す、**ストイックなまでの根気。**

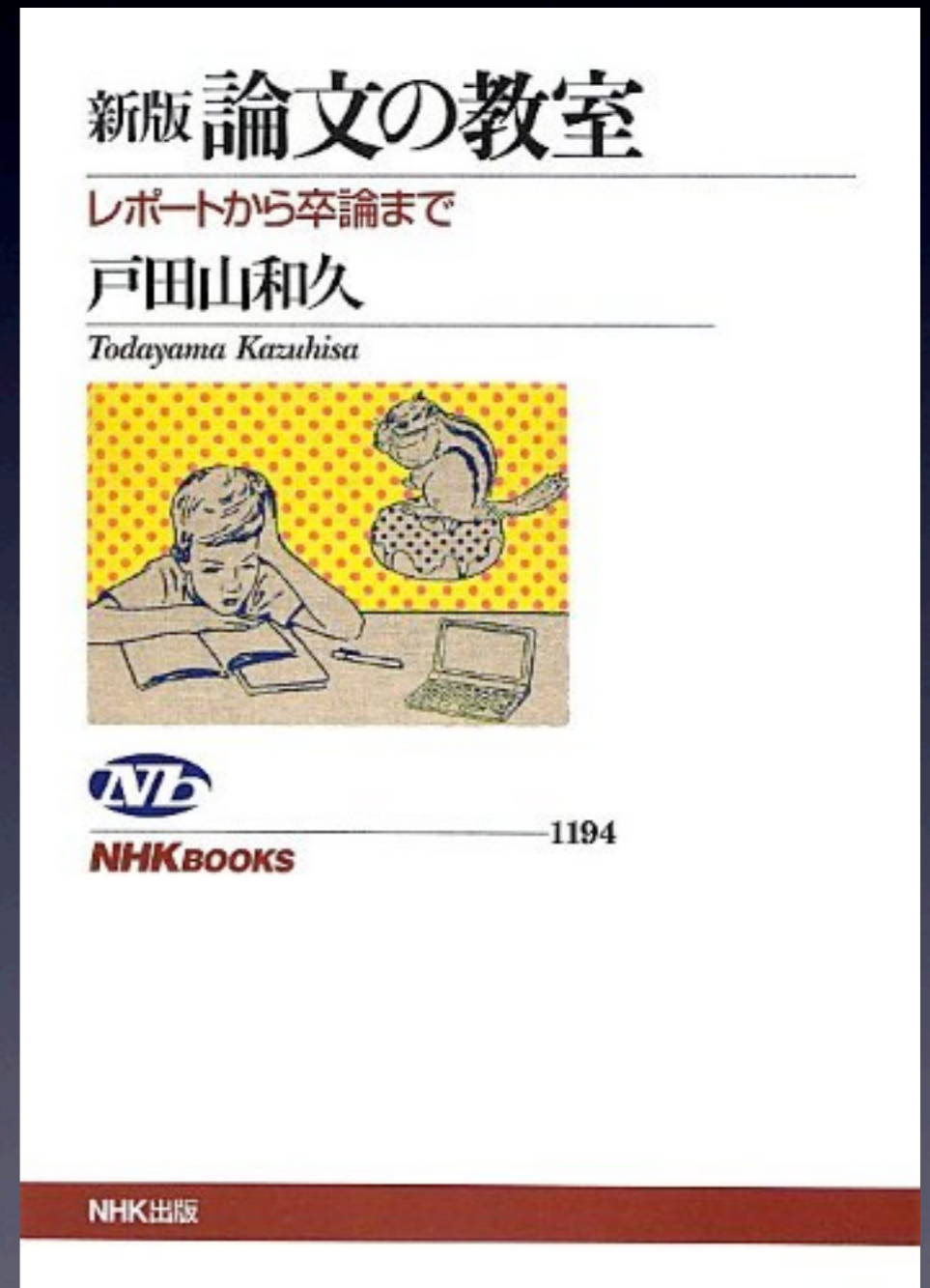
レポートや論文作成に 役立つPCツール

- **Evernote**。アイデア・ノートを書き溜めるのに使える。自動保存される。
- **Mindmap**。キーワードやイメージをつなげ、思考を整理して発想を得るための概念地図ツール。草稿作成などに便利。
- **Powerpoint**や**Keynote**。プレゼン用だが、カードやメモ代わりに使える。アウトラインの作成にも便利。
- **Dropbox**や**SugarSync**, **Google Document**などのオンラインストレージサービスに、ファイルや資料を保存しておくると便利。
- **LaTeX**など、数式の組版処理や、レイアウトが美しく整った論文・著作の作成に向けた文書作成ツール。



参考文献

- 戸田山和久、『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』、NHK出版、2012年。
- 著者は著名な科学哲学者。教師と学生の対話を交えた、くだけた調子で書いてあり、内容も高度ながら、読みやすい。作文ヘタ夫くんの成長物語に、読者は感情移入がしやすいだろう。



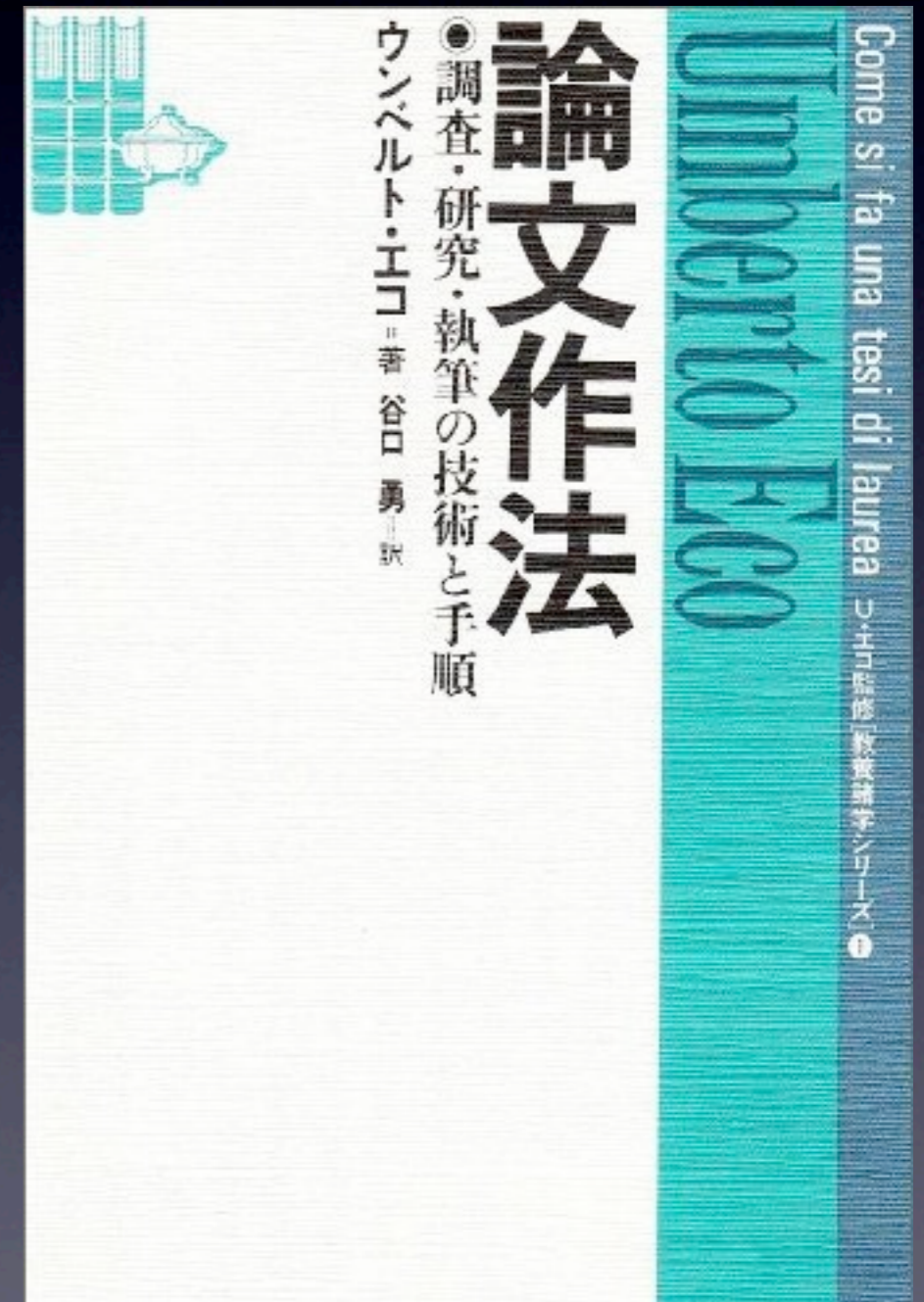
参考文献

- 木下是雄、『理科系の作文技術』、中公新書、1981年。
- 理系向き、とりわけ実験科学系向きだが、文系にとってもおおいに参考になる。少し古いが、内容は衰えていない。座右の書として、是非手元に置いておきたい本。



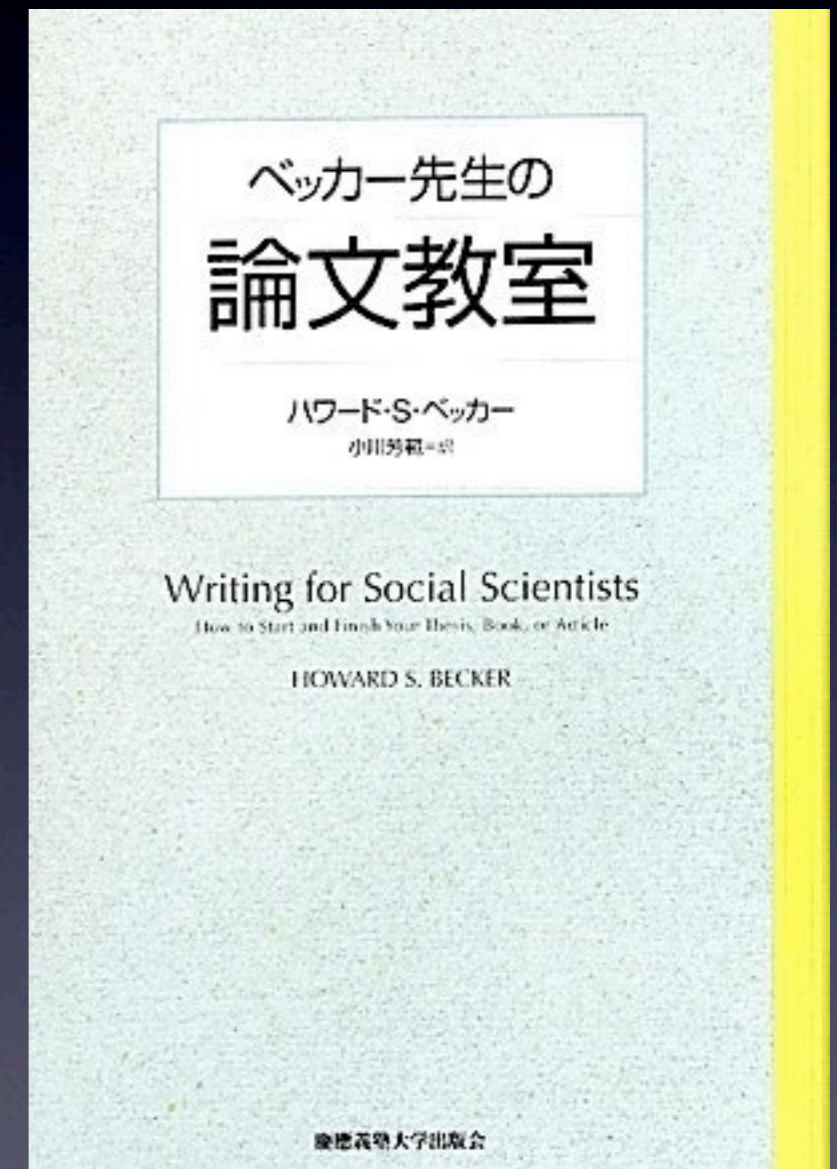
参考文献

- ウンベルト・エコ、『論文作法』、谷口勇訳、而立書房、1991年。
- 著者は『バラの名前』で一世を風靡した著名な小説家であり、記号論や中世・ルネサンス研究でも世界的に知られた哲学者。
- 人文系、とりわけ文学や哲学系向き。本格的な卒論を書きたいなら、これ。読んでいるだけで、研究意欲がみるみる高まっていく本。



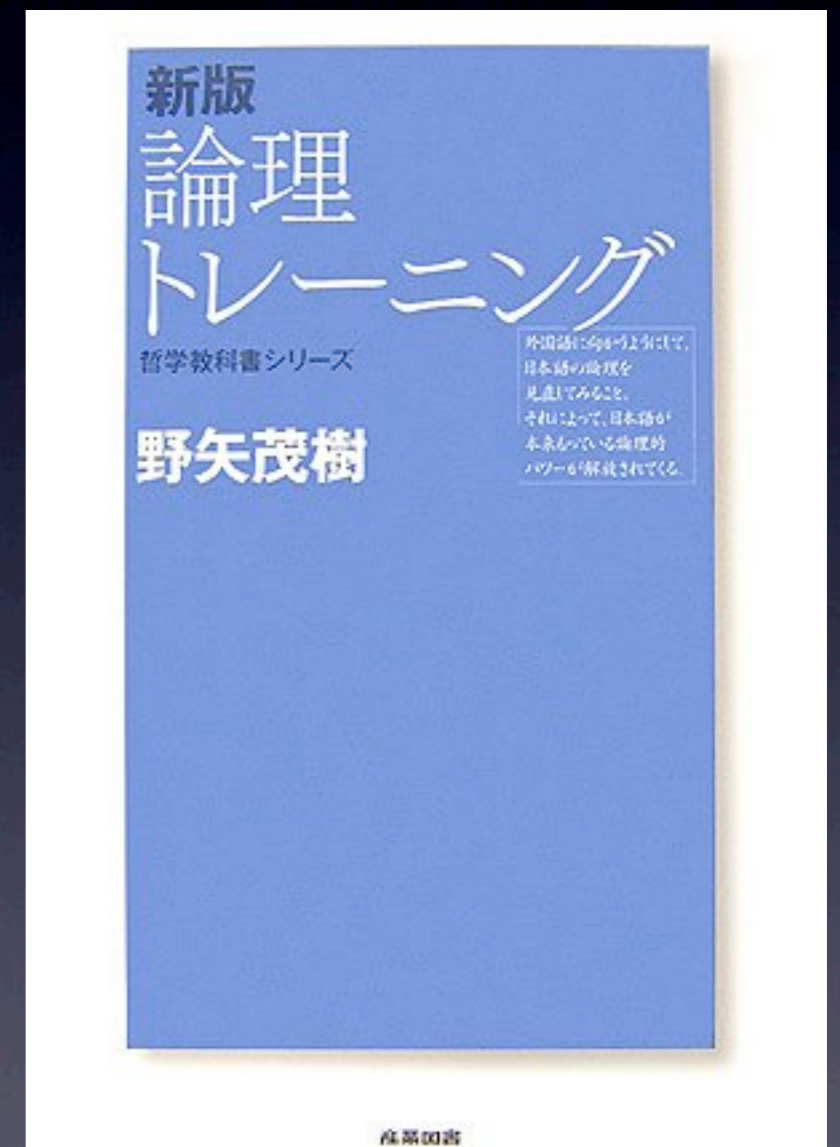
参考文献

- ハワード・S・ベッカー、
『ベッカー先生の論文教室』、小川芳範訳、慶応義塾
大学出版会、2012年。
- 社会科学系、大学院生向き。
社会科学者にとって、書くとは
どういうことか、文章表現
のセミナー教室での体験をも
とに書かれたユニークな本。



参考文献

- 野矢茂樹『新版 論理トレーニング』産業図書、2006年。
- 練習問題を通じて、論理的思考を訓練し、文章を論理的に構成するコツもつかめるお得な本。



参考文献

- 結城浩 『数学文章作法 基礎編』
ちくま学芸文庫、2013年。
- 『数学ガール』シリーズで名高い、現役執筆者が、読者にわかりやすく「伝える」文章の技術を伝授。プロの文筆家として、大学の先生よりも、ある意味、読者のことを考えて書いていると言えるので、数学の学生だけでなく、他分野の学生や教員にとっても非常に参考になる。



以上で本日の講習はおしまいです。

ありがとうございました。